

Bricolage

ケアの情報とその深部へ 1994年12月15日第三種郵便物
2019年3月15日発行(第6回) 寄附月15日
第31巻6号(通巻第2)



2019年
春号(4月・5月)
Vol.25
600円+

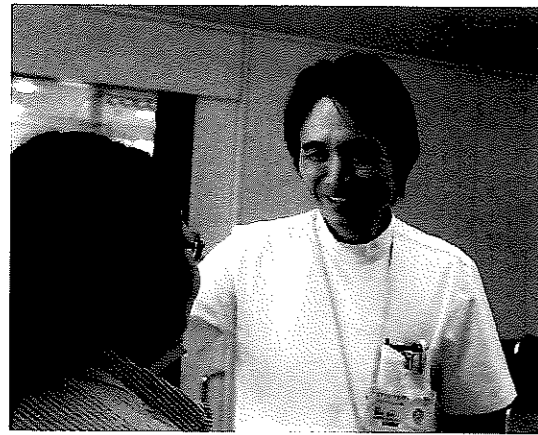


越境するセラピスト

介護に役立つPT・OT etc. カタログ



新・地下水脈
介護の世界に越境せよ
三好春樹



原宿リハビリテーション病院筆頭副院長
福岡県生まれ。
1979年九州リハビリテーション大学に入学。1982年同校卒業後、福岡市内の病院に理学療法士として勤務。地域で訪問リハビリなどに取り組む。その後医師を志し、1987年香川医科大学に入学。1994年より伊豆通信病院（現NTT東日本伊豆病院）に勤務。2005年よりNTT東日本関東病院リハビリテーション科部長。2018年10月より現職。医学博士。
脳卒中の急性期から緩和ケアの終末期まで幅広いリハビリを実践。院内すべての科にわたり廃用症候群や嚥下障害などの合併症を早い段階で予防しながら、患者さんのQOL維持に努めている。2010年より3年間NHKの福祉ネットワーク「日本リハビリ応援団」に出演した。単著に『老人ケアの元気くすり』（医学書院）、『介護者のための脳卒中リハビリと生活ケア』（雲母書房）、『リハビリの心と力』（学研）、共著では『遊びリハビリ』（医学書院）、『リハビリテーションビジュアルブック』、『摂食嚥下ビジュアルリハビリテーション』など多数

いや待遇の差など、比べれば比べるほど自分と大きな差があるように感じました。当時の私は未熟で、視野が狭かったのだ、と今は思います。仕事をすること、もともと患者を診るための知識を得たいと思い、医者になろうと決意しました。
何度も受験を繰り返し、32歳のときに香川医科大学に入学することができました。

●私が「PT・OT・ST」になった理由

6年後、38歳で医者になることができました。医学部時代に結婚し、卒業するとき

には2人の子持ちになっていました。卒業後は香川医科大学の内科の医局に入局しましたが、教授を頂点にした封建的な体制についてゆけず、研修医を終えた時点で医局を辞めてしまいました。「医師としてもまったく未熟で、家族もいて、これからどうやって暮らしていくのか？」と心配してくれた大田仁史先生が、ご自身の勤務されている伊豆通信病院（現在のNTT東日本伊豆病院）に招いてくれました。ここでリハビリ医として勤めるようになった。11年間勤務した後、東京のNTT東日本関東病院に転勤となりました。

関東病院では脳卒中の急性期からがんの終末期まで、広く患者さんのリハビリに関わりました。各診療科の医師や看護師さん、コメディカルスタッフ、リハビリ科の仲間たちに支えられ、多くのことを学び、よい仕事をさせていただいたと感謝しています。伊豆病院と関東病院とを合わせてNTTの病院には24年間勤めました。
2018年10月からは、原宿リハビリテーション病院に勤務しています。病床数が320床の回復期のリハビリ病院で、日々、多くの患者さんが入院され、そして地域に帰って行かれます。患者さんとそのご家族がよりよい生活を取り戻すために、私たちスタッフ一人ひとりの技術と優しさが大切だといつも感じています。病院内はもちろんですが、病院と地域、相互の連携を強めながら、生活に根づいた介護やリハビリテーションの実践ができれば、と願っている昨今です。

先 絡 連

原宿リハビリテーション病院
〒150-0001
東京都渋谷区神宮前 6-26-1
・TEL : 03-3486-8333
・E-mail : inagawa@harajuku-reha.com



医療も介護も

私が介護やリハビリに惹かれた理由
稲川利光 さん



高校時代はラグビーとオートバイに明け暮れ、成績はいつも下の下でした。

浪人して、一から勉強し直し、なんとか佐賀大学に入学できました。しかし、入学して間もなく、祖母は重い心臓病で緊急入院となり、以前から介護が必要だった祖父は、リハビリができるという病院に入院せざるを得なくなりまりました。

祖父母の介護のため、私は佐賀大学を中退し、再度、自宅から通える大学をめざすことになりました。昼間は予備校に通い、夜は祖父母が入院している病院に行つて介護をする日々が続きました。入院直後から祖父は認知症がひどくなりました。祖父は夜中、不穏になると、すぐに鎮静剤が打たれ寝かされてしまいます。「リハビリをしてくれる病院」と聞いて、期待して祖父を入院させたのですが、

数日のうちに祖父は食事も摂れなくなり、寝たきりのまま過ごすようになりまりました。

翌年、私は、九州大学農学部で合格しました。合格通知をもらった数日後、祖母が亡くなり、その2週間後に祖父も亡くなりました。祖父の膝は強く拘縮し、曲がったままで伸びませんでした。仙骨部や両膝、両踵などにも床ずれがあり、棺桶の蓋も閉まりませんでした。「リハビリテーションっていったい何なのだろう」「病院って何なのだろう」と、医療者への不信や不満で耐えがたい気持ちになりました。そして、そんな医療者に頼らざるをえなかった、家族の無力さを痛く感じました。

九州大学卒業間際に就職が決まりました。たまたま友人につきあつて受けた銀行の入社試験に受かったのです。成り行きで進路を決めようとしている私に対して、兄は「そんな

ことで将来を決めていいのか？」と言いました。重度の心身障害児施設で働いている兄はその仕事を通じて、私に「PTにならなにか？」「これからはリハビリの分野が社会的にとっても重要になる。」と何度も勧めていました。兄の言葉を聞きながら、十分なケアを受けずに亡くなった祖父のことが目に浮かびました。

進路に迷いながら、私は九州リハビリテーション大学を受験し、合格しました。この学校には、私と同じように、大学や仕事を辞めて来た者が少なからずいました。三好春樹さんもそのひとりでした。
九州リハビリテーション大学卒業後、私はPTとして福岡市内にある病院に勤めました。働き始めた当初、医者をとても権威的に感じました。知識の広さと深さ、立場の違い



絵と文字 稲川利光